

## 「愛顔(えがお)あふれる愛媛づくり」

平成28年度「知事とみんなの愛顔(えがお)でトーク」知事講話

開催日時：28.6.24(金)

開催場所：松野町コミュニティセンター

どうも皆さんこんにちは。今日はそれぞれ皆さん忙しい時間帯だと思いますが、「愛顔でトーク」にご参加いただきまして誠にありがとうございます。今日は宇和島市、ご当地松野町、鬼北町、愛南町と、「いやし博」で県と一緒にやっていただいたエリアの皆さんにお集まりいただいたところでございます。今日は南予博も含めていろいろな対話ができればと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

### 【県の施策の3つの柱】

今、県政の主要課題というのは、本当に複数の路線を同時並行して走って行くわけですが、中でも力を入れているのが3つございまして、1つには防災・減災対策。これは県民の命を守るという観点からもいつの時代においても最重要課題でございます。そして2つ目が今日の社会的現象であると言っても過言ではございませんが、少子高齢化に伴う人口減少対策。3つ目がこのことなくして地域の存続はあり得ないということで、地域の活性化政策。この3つが主要な柱の政策になっています。

### 【県立高校の耐震化・住宅耐震化の支援】

とりわけ第一の防災・減災対策は場所によって対応が全く異なる課題も出てまいります。共通して行わなければならない問題もございまして、例えば、いざというときに避難所にもなる、子どもたちの命も守れるということで、県の場合は県立高校を抱えております。県立高校の耐震化については、実は4年前まで全国で1番低い整備率でありました。58.2%しか耐震化が進んでいなかったこともありまして、これについては最大級の財政投入をしようということで急ピッチで工事を行っております。今年度末で90%を超えると思っております。来年度末には100%事業が完了して、全ての県立高校の耐震化工事が終わる予定になっています。この後が私立高校、そして小中学校も含めた学校関係、さらには警察、県の各公共施設といったところの耐震化も順次進めていく予定であります。同時に地域の皆さんの課題も並行して行わなければなりません。市町と連携しながら木造住宅の建物に対する耐震診断の補助制度が去年から立ち上がり、そして、今年度からそれに伴う耐震工事の補助制度というものも市町と協力して制度として立ち上げたところがございます。こうした課題については全県共通ということになります。

### 【自主防災組織の整備】

さらにもう1つは、大きな災害が起こったときには、当然のことながら消防局や消防団全てが全ての被災現場に行くことはマンパワー的にもできないわけがございます。東日本大震災のときもそうでありましたし、その他の震災のときにも同じ現象が起こっておりますが、当初段階で1番力になるのは何と言っても隣近所の助け合いということになります。そこで、これは実は松山市長のときにやった経緯がありまして、隣近所の助け合いを日ごろからグループ化して訓練を積み重ねれば、いざというときの救命率も格段に上がるので

はないかということで、自主防災組織の結成をまず最初に呼び掛けた経緯がございました。ただ、結成はしても魂を入れなければ意味がないということで、自主防災組織単位に防災士の資格取得者を誕生させるということに取り組みました。結構お金のかかる話でありましたので、そのときに考えたのは、これは個人の資格ではなくて自主防災組織の推薦という条件をつければ公の資格になるじゃないかということで、全額公費を投入する制度を当時松山市で立ち上げまして、全国で最も防災士の人数が多い市になった経緯がございます。県の仕事をいただいたときに、これを全県に広げたいということも考えて、県下の20の市長さん、町長さんと相談しまして、この松山市方式を全県下でやりたいと。ついては県半分、市町半分でやりませんかと投げ掛けたところ、皆さん同意していただきまして、現在急ピッチで全県下の防災士資格取得者を増やしている状況にあります。現在、47都道府県の中で最も防災士の資格を持っている方が多いのは東京都でございます。第2位が大分県、愛媛県が第3位で7,600ぐらいで、大分はもうすぐ抜けるのではないかと思います。この後も、この7,000人を超える防災士の皆さんをほったらかしにするのではなくて、県連合をつくって情報交換やそのまたネットワークをつくるということを今年から始めているところでありまして。こうしたことを通じて、資格、知識を持った方がリーダーとなり、そしてまたその方の下に各地域ごとに訓練を積み重ねるということで、いざというときに備えるということを追いかけているところがございます。これもまた全県共通の取り組みになるわけでありまして。

#### 【緊急避難路の整備と高速道路延伸】

しかしながら、場所によっては独自の取り組みが必要なところも出てまいります。特に宇和海沿岸部につきましては、南海トラフ地震が起こったときに大きな津波が発生する恐れがあるということで、内陸部とは違った対応が必要になってきます。ここにつきましては、特に愛南町、宇和島市、西予市、八幡浜市の市長さん、町長さんと話しまして、2年でどうしても必要な場所に緊急の避難路を一気に整備したいという県の補助制度を立ち上げました。市長さん、町長さんも、それはぜひやりたいということで352カ所の緊急の避難路を一気に整備するという事業を4年前に立ち上げさせていただきました。この事業につきましては、昨年度末で352カ所の避難路整備が完了しております。今、第2段階で、その場所に、例えばちょっとだけ滞在する必要が生まれたときに備えた資機材の配備であるとか、緊急の場合の食料の配備であるとか、こういったことをきめ細かく行っているという段階に入っております。そのほかにも、県道あるいは国道の整備もそうでありまして、何と言っても宇和島から愛南に至っては国道56号しかありませんから、完全に分断されてしまう、ここは命の道であるということで、とりあえずは宿毛までの高速道路事業の推進に向けて全力で国にプッシュをかけているところがございます。

#### 【県産木材を使った砂防ダム】

沿岸部というのはこうした津波対策というのが非常に大きな問題になってきますけれども、一方で山間部は土砂災害の危険性がございます。今日もまだ警戒本部が立ち上がっているところで、順次本庁と連絡を取り合いながら今日1日過ごしているんですが、これも巨額の費用がかかるわけでありまして、一足飛びに整備することができません。そこで今、ヒントを得たのが西条市の取り組みだったんですが、土砂災害というのは山の上のほうで雪だるまが膨らむように大きくなっていきます。最初は小さな土砂からグワーッと膨らん

でいった大きな災害につながるということで、山の上のほうで小規模な県産木材を使った砂防ダムをつくったら、根っこのところで抑えられるのではないかということで、1個つくるのに300万円ぐらいで、しかも木材の利用ができるということですので、今年は東予、中予、南予それぞれ1つずつ選定いたしまして効果の検証に入っているところでございます。こうした根っこの部分で費用対効果も考えながら、愛媛らしい取り組みで県民の安全・安心を守るということに全力を尽くしているのが第一のテーマでございます。

### 【少子高齢化に伴う人口減少対策】

第二のテーマは少子高齢化に伴う人口減少であります。これは東京、大阪などの都市部を除いた全国共通の悩みになっています。単純に考えれば、ちょっと今上がりましたが、出生率が1.4ぐらいをうろうろしている状況が今日本の国では続いています。単純に言えば、2人のご夫婦に1.4人の子どもしか生まれて来ない。この現象が続くと当然のことながら高齢化が進み、少子化が進み、全体では人口が減るという現象に帰結することは言うまでもないところであります。じゃあどうすればいいかということ、3つのアプローチを考えています。1つは出生率そのものを上げるにはどうすればいいのかという取り組みであります。2つ目は人口の流出をどうすれば食い止められるのかということでもあります。3つ目は人口の流入をどうすれば促進できるかという3つのアプローチで減少問題を考えているんですが、根本的には出生率を高めていかなければ解決はできないことは言うまでもありません。そこでいろいろな分析をしました。皆さんがどうか分からないのですが、女性の結婚の平均年齢が僕らの時代は25、26歳だったと思います。男性が27、28歳ぐらいだったと記憶しているのですが、最近は30を超えるようになりました。そうすると、どうしても第1子を授かる年齢が上がりますから、なかなか第2子、第3子、それは手当の問題もあるんですが、第1子誕生のときの年齢が高くなると少子化が進むというのは世界的な傾向であります。スウェーデンはかつて出生率が低くて、1.5ぐらいだったんです。結婚年齢が30ぐらいでしたが、25まで5歳結婚年齢が落ちたんです。若返ったんです。そうすると出生率が2.0になったという実績を上げました。そこで、少しでも早く結婚できるような状況をサポートできないかなということの後押ししているのが、婚活事業でございます。若い人に「少し結婚が遅くなった原因は何？」とアンケートを取ると、出会いの機会がないということが圧倒的に多かったんです。そこで、出会いの機会をサポートということで婚活事業を立ち上げましたが、今愛媛県の婚活事業は全国からも注目されておりまして、なぜならば実績が上がったからなんです。7年ぐらいで誕生したカップルが9,000組を超えました。毎年100組以上が結婚しましたという報告を県のほうに寄せてくれていて、その累計が600組を超えています。報告がないカップルもいますから実際にはもっと結婚していると思うんですけど、非常に効果が上がっている稀な例だということです。一体どうしてそうなったかということ、官と民が力を合わせてやっているということがまず背景にあります。そして今までの蓄積されたデータをうまく使ってカップリングをするんです。例えば、性格によっては大人数のほうで自己アピールができるタイプ、1対1じゃないとアピールできないタイプとかいろいろな性格の違いがあって、それらをしっかりと分析して、好ましい相手と県の婚活事業のほうでペアリングをするんでカップル成約率が非常に高いということが結果として生まれました。こうしたことを通じて、出生率の観点で言えば、出会いの機会をどんどんつくってあげるといったところに力点を置いていま

す。

### 【地元就職の推進・移住政策】

人口流出の点では、若い人がいても東京や大阪に行ってしまうケースが多いですね。大学とかで県外に出てそのまま向こうに行ってしまうケースもあります。これは少しでも何とかできないかなということで2つやっているのが、1つは早い段階、中学生ぐらいの段階で地元にはこんなに可能性のある産業がありますよと、それは1次産業でもいいですし、東予だったらものづくりの中小企業でもいいです。こういうものがふるさとにあるんだということを知らないケースがあまりにも多いということに気付きました。そこで、できるだけ早い多感な時期に、ふるさとの魅力、業という観点から魅力を伝えていくということをしつかりと行うことによって、大人になったらふるさとにという気持ちが少しでも芽生えるようなことにつながれないかと考えています。そして、今年から県外に行った大学生に就職のためのふるさと帰省補助制度というものを立ち上げました。これは愛媛出身で東京、大阪で働いている若者に対してメッセージを送りまして、この時期に愛媛県内で合同就職説明会を開きます。それに参加をしてくれるのであれば、ここがミソなんですけど、せこいと言われればせこいんですが、片道の交通費を出しましょうと。往復じゃないんですね、片道。結構利用するんですよ。これは条件つきですから片道は無料で帰ってきます。必ずその合同就職説明会に参加してくれます。ふるさとでのんびりして、片道は自腹で帰っていくと。これは新しく立ち上げたんですが、非常に有効だなと今回感じましたので、継続して行っていきたくと思っています。そして今年の4月からは、東京で移住コンシェルジュに常駐していただくことになりました。民間の方であります。そこに住宅情報であるとか、就職の情報であるとか、そういう情報を提供して移住相談にワンストップサービスで向き合っていただくという仕組みを構築したところがございます。こうした取り組みを通じて、流入対策、流出対策、出生率の向上対策、さまざまな観点から人口減少対策に向き合っています。

### 【地域の特性に応じた企業誘致】

最後のふるさとの活性化でありますけど、これは地域によってやり方が全然異なってまいりますけど、とりわけ南予地域については1次産業の活性化なくして将来を切り開くことができないと考えています。例えば、その中で苦心したのが、雇用の場をつくるためには企業誘致も非常に重要なテーマなんですけど、ここに土地があるから来てくださいと言ってもなかなか簡単には来てくれません。南予ならではのアプローチをしっかりとやらなければ実現はしないと思いました。南予の基幹産業は1次産業であるとするならば、来てくれる工場は食に関連する、あるいはそういったものを活用していただける企業に絞り込むという基本的な絵を描いたところがございます。昨年は県の職員も頑張ってくれまして、新たに南予に3つの工場が県外から来ることになりました。1つは今日お集まりの皆さんの地元ではないですが、西予市。日本有数の冷凍コロツケの製造メーカーである「ちぬや」という会社がございます。本社は香川県ですが、大きな工場をつくる計画があるという情報がありましたので、取り合いになりましたが最終的には西予市に工場をつくるということで合意を得まして、これから建設に入っていくところがございます。そして今日の皆さんの地元に関わるとすれば、1つにはまさに地元松野町、「プロテックス・ジャパン」という会社でありますけど、これは化粧品メーカーであります。もともと社長は吉田町出身の方で、

京都に本社を置いて全国展開されている方ですが、地方に工場をつくるという情報が入ってまいりました。私も本社に伺いまして、ともかくほかの県に行かないでくれと。吉田町出身だったら吉田と限定はしないけれども、少なくとも愛媛に帰ってきてほしいということでいろいろなアプローチをしたところ、松野町さんにも本社に行ってくださいましたが、その熱意が伝わりまして、松野に工場をつくるということで今、建設中であります。先ほども建設現場に行ってきましたが、ここも今年の11月中旬には稼働して地元雇用も生まれてまいります。ちなみにその化粧品に何をを使うのかと言いますと、柑橘のエキスをを使うということが1つつながったところでありまして。もう1つが松野や鬼北も関係してきますが、宇和島に誘致が決まった「源吉兆庵」という会社の工場誘致でありました。この「源吉兆庵」は高級和菓子メーカーでありまして、世界にも展開しています。工場をどこか地方にということをお聞きしたので、当初段階で交渉したところ、実は鬼北町でほぼ決まりかけてはいたんですがなかなか条件面でいろいろと合意ができなくて、愛媛はやめるという方向に向き始めた時期がありました。そこでもう1度チャンスが欲しいということで、いいところを探し出すから考えてほしいという交渉を続けまして、宇和島市さんがここはどうだろうかという場所を出してくれたので、今回そこに決まったところでありまして。ここが何で南予に来てくれたかという、契約栽培、日本一の和菓子メーカーですから素材をすごく大事にしています、基準も厳しいです。その基準に合った1次産品を供給していただけるならば行きましょうということだったので、これは鬼北、松野、宇和島、全ての地域でモモ、ビワ、カキ、将来はサクランボも視野に入れてますけど、愛媛県産のものを使った和菓子を世界に届けるということで現在工事が進み始めているところでございます。その地域の特性というものを売りにしてターゲットを絞っていけば、ハードルの高い企業誘致も決して不可能ではないということを実感した1年でもありました。

#### 【県の試験研究機関と商品のブランド化】

さらに言うと、愛南町の場合は魚がありますが、これは今年初めて完全養殖に成功した「スマ」の正式な販売が秋から始まります。愛媛大学と共同して愛媛県の水産研究センターが5年の歳月をかけて完全養殖を達成いたしました。ライバルは今のところ和歌山県でございまして。今年の1月試験販売で、和歌山県が日本で初めて養殖「スマ」を大阪の阪急百貨店で販売するということを打ち上げたんです。1月16日から和歌山が売ることでしたが、愛媛県はその1日前の1月15日にこちらは阪神百貨店で和歌山よりも1日早く販売するという熾烈な競争をやっています。非常に養殖の難しい魚なんですけど、宇和海の海のおかげで順調に育っているところでありまして。どんな魚かという、2kgから3kgぐらいのサイズで切ると全身がマグロのトロという魚で、幻の高級魚と言ってもいいと思います。2、3kgということは店舗扱いができるサイズであるということ、そしてトロ成分が多いということはアジアを含めた輸出もやがては視野に入ってくるということ、そういったことで養殖関連業者の皆さんの収入に直接つながるような魚種の開発という観点で今進められているところでありまして。さらに新鮮なうちに届けるということで今年からちょっと研究しているのは、瞬間冷凍ではなくて「シースノー」という僕も初めて聞いたのですが、海水を氷にするんです。雪状の氷になる。塩分が含まれている氷になって、それを魚の上に置くと鮮度が維持できるという科学的なデータが出ています。そこで、その機械を今回愛南町に試験導入して将来これが使えないかという研究を今年度から始める予

定にしております。これは西予市が中心になりますが「あかね和牛」という全国でどこもやっていなかった牛肉を開発するという事で5年前に立ち上げたプロジェクトがありました。高級牛肉は、どこの肉もうちのほうがサシが乗っていると競争しているんですね。でも、消費者の皆さんは脂肪のサシよりも今健康志向で、赤身とかうま味を重視する傾向が強くなりました。そこでT P P。これは幾ら言ったって絶対やられるだろうなと思っていたので、T P Pに早くから備えて戦える牛肉をつくるということで、当時考えたのが今申し上げた消費者の動向、どこもやっていないという2点を考えて黒毛和牛の赤身肉というコンセプトを追求してきました。県の畜産研究センターの職員が頑張ってくれて、通常の黒毛和牛と比べると脂肪分が20%ダウン、その分赤身が増えたということです。うま味成分であるグルタミン酸が2.5倍含有されていると。黒毛和牛の味をしっかり残した赤身肉ということで目処が立ったので、昨年秋から市場に投入を開始しました。これが「愛媛あかね和牛」というブランド牛でございます。事程左様に、品質のいいものをつくるという点において、愛媛県の職員が頑張っている研究所がフル回転してくれています。水産研究センター、みかん研究所、農林水産研究所、畜産研究センター、養鶏研究所、それぞれ専門の職員が研究を積み重ねていますので、1次産業の後押しについては、まずつくる段階からのバックアップが重要と考えています。

#### 【県営業本部の活動】

そしてもう1つは売ること。実入りがなかったら意味がありません。売ることに関しては、たまたま私が元商社マンでありましたから、そのノウハウを県庁職員に伝授して立ち上げたのが営業本部という組織でございます。県の営業本部として何ができるのかを議論して、そこに没頭して販路拡大につなげていくという体制を整えております。すでに4年目に入りますが、初年度、愛媛県の営業本部がお手伝いして売ることのできた金額が8億円でありました。2年目が27億円になりました。3年目が56億円になりました。4年目の今年の3月が89億円までいきました。ここまでは予想どおり順調に伸ばすことができましたが、これから100億が壁になってまいります。新たな市場、これは海外も含めて、それからインターネット等の活用、さまざまな技術的な問題を追求しなければ到達できない金額になってまいります。今、営業本部一丸となって我々がもうけるわけではなくて、地域の皆さんにもものづくり、1次産業、伝統工芸品、あらゆる営業面での後押しを県が担っていくということに没頭しているところであります。

#### 【自転車を活用した観光振興】

もう1つ地域を活性化させる大きな手段は、人に来てもらう仕掛けをどうつくっていくかであります。これもよそと違うことをしなければ人は振り向いてくれないということで、5年前から取り組んできたのがサイクリングを活用した新しい観光施策でありました。その初っ端口火を切ったのがしまなみ海道であります。しまなみ海道はうまく軌道に乗らして、世界の7大サイクリングコースにも選ばれました。週末になると外国人が大勢押し寄せてくるような日常風景が定着したところではありますが、問題はしまなみ海道は南予の皆さんにとって他人の庭の出来事ではないということでもあります。しまなみ海道はもう世界に情報発信できていますから、世界中から人が来ます。そこで愛媛県には東予や南予にもこんなにいいところがあるんですよと、来た人に2次情報を提供するという事を考えています。それをキャッチした人が、今度は南予のほうに行ってみようというところに

持っていくのがその目的であります。第1段階はしまなみ海道を世界のサイクリストの聖地にする。今第2段階に入っているんですけど、愛媛県全体をサイクリングパラダイスにする。さらにその先には四国全体をサイクリングアイランドにするという3段階計画で物事を組み立てて普及を進めているところでございます。

最初は自転車が増えてもあまりお金は落ちません。サーっと行ってしまふかもしれない。でも次のブームが来ると、だんだんお金が落ちるようになってきます。さらに有名になってくると、今度は自動車で来てレンタサイクルで走る人たちが生まれてきます。こうなってくると宿泊、食事、お土産購入と、消費活動がどんどん増えていくんです。ただし、ほおっておいたら情報がないですから素通りされていきます。最初、しまなみ海道の島の皆さんは「知事、自転車の皆さん来てはくれるけど素通りじゃ」と言っていたんだけど、そりゃそうだ。あなたたちが努力しなかったら素通りですよ。皆さんがここにはこんないいものがあるんですよ、こんなおいしい食べ物屋さんがありますよ、こんないいお土産がありますよということを努力して情報発信すれば、来た人がその情報をキャッチして、ここまで来たならあそこに寄らなきゃという行動が起こるんです。そこで初めて消費が生まれるんですよ。人を連れてくる場所までは僕やりますけど、そこから先、あぐらかいて何もかもうまくいくななんて思ったら大間違いですよ、ということを直接言いました。今、そこに気付いて、島の人たちがいろいろな仕掛けを始めていますので、本当に自立しながらだんだんよくなっていくんだらうなという感じがしています。

#### 【イベントは地域住民が主役】

そして、同じように南予に期待しているのは、「いやしの南予博」であります。これも「いやし博」のときと同じで県は主催者ではありません。あくまでも住民の皆さんが主催者であります。住民の皆さんが主役で、その地域の行政が同じような気持ちになって一緒にやろう、それで県のPRをうまく活用しようじゃないか、という気持ちが生まれたところには人が来ているようです。でも、県が勝手にやればというところにはやっぱり人はあまり増えていません。これはそれぞれの地域が決めることなので何とも言えませんが、このチャンスをぜひ生かしていただきたいと思ひますし、現実に今、「いやしの南予博」期間、去年のプレ大会の昨年度と比較しますと、訪れたお客さんは倍増しています。それを実感している地域と感じていない地域に差が出てきているのは間違いないと思ひます、これはまだまだ続きますので、ぜひチャンスを生かしていただきたいと思ひます。

#### 【宇和島圏域の各市町の魅力】

特に今日の皆さんの地域、僕もいろいろな思い出がありますが、宇和島は今年はえらい目に遭いましたけれども、「だんだんマラソン」、あれはきれいなコースなんですよ。正直言って、松野の「桃源郷マラソン」、西予の「朝霧湖マラソン」それよりもコース的にはきついかも知れません。逆にそれを売りにしたらどうかと。きつから挑戦してみたいとなれば、また人も来るでしょう。なんせスタート地点は遊子の段々畑、最高の風景ですよ。そこから上がって行って、先は細木運河という日本でも1番狭い運河のところについて、下りてUターンしてくるんですけど、風景はすごいきれいなところですよ。そういった1回目の大会が記憶に刻まれました。

あるいは吉田町。高速道路が開通したときに最も影響を受けたのが吉田町です。マイナスの影響です。交通量が40%近く減った、高速が通ったことで逆に人が来なくなった。本

当に吉田町は意気消沈していたので、そういうときこそ対話をしたいということで、地元の皆さんと体育館で1回話し合おうという会を催しました。300人ぐらいの方が集まっていました。「もう吉田駄目や」という声も飛び交っていましたが、そんなことないです。ここには宇和島伊達藩とは違う吉田の伊達藩の歴史があるけど、全然磨かれてないじゃないですかと、そういうふるさとの価値を磨きましょうよと。何かないんですかと聞いたら、「おねり」という風習があるんだと。「それみとおみや」と300人のうちのある人が巻き物を出してきて、それはそれは立派な巻き物でした。これを復活させたらいいじゃないですか、県もバックアップしますよということで、「おねり」の台座の復元が始まりました。そして2年前の「おねり」の完全復活に至るんですけど、それ以来、吉田のお祭りは本当に活気づいています。ちょっとしたことで何かきっかけが生まれるんだと感じた瞬間でもありました。

愛南町はブラッと自転車で走ったんですけど、深浦漁港から走って外泊の「石垣の里」まで快適に走りました。そこから先はちょっと上り坂があるんですけど、愛媛最南端の高茂岬、この風景は圧巻で、どうしてみんなここをアピールしないのかなと。何でみんなここに来ないのかな。車が少ないということは、自転車にとっては最高の場所なんですね。島なんか信号がないんだよ、ここは自転車には最高じゃないかと、逆転の発想です。それを生かすという観点で見れば、宝物に生まれ変わるというケースは幾らでもあります。そこから西海の海を巡ってくるコースはドライブでもいいですし、もっともっとPRすべき場所だなということをつくづく感じました。また、愛南町では町長さんも頑張ってるトライアスロンも定着を見えていますし、これから「びやびやかつお」に「スマ」が加わり、食べ物とうまく関連させた誘客の手法を考えていけば面白いなと感じています。

また鬼北町は町長が面白い企画をして、日本で唯一「鬼」という名前がついている町なので、鬼にこだわったまちづくりをすると。道の駅に「鬼王丸」という巨大な鬼のモニュメントをつくって、もうすぐ日吉夢産地の道の駅に女性の鬼のモニュメントが誕生するらしいですね。僕も遊び心で町長いいアイデアあるよと。「何？」って言うので、全国鬼嫁コンテストってやったら面白いよって、最初冗談で言ったら本当にやることになってしまっていて、今年3月第1回鬼嫁コンテストが行われました。面白い、これは絶対継続事業になると予感しました。ただし工夫がいる、テレビ放送につながりますから、公開収録を兼ねた松山市発の日帰りバスツアーというものを企画すれば人は呼べますよと。企画と輸送手段とをうまく組み合わせることによって人をいざなうことは十分可能なので、来年はその方向で検討する旨、話が進んでいるところでございます。ここにはキジの肉もあります。僕が特に鬼北で思い出に残っているのは、2つの流しそうめんがあるんですけど、「安森洞」というところと「節安」というところの流しそうめんは本当にうまかったな。これももっとアピールすればいいのになということを感じます。

そして松野町は、前回の「いやし博」で生まれたキャニオニングが非常に全国にも広がって、多くの方が訪れるようになりました。あの自然の宝物「雪輪の滝」というのは大いに生かすべきだと思いますし、また四万十川との連携、三間から松丸、松丸から鬼北を走って四万十の十和までのサイクリングコースは、非常にフラットで初心者にも女性にも走れるいいコースなんです。ここでは「2リバーライド」というイベントを高知県を引っ張り込みまして実施するようになりました。実は今日は今年の2リバーの募集をかけたんで



すが、9分で満杯になりました。たった9分でいっぱいになっちゃうんですよ。それぐらい南予には魅力があるということで、地域の皆さんも自信を持ってこの「いやしの南予博2016」を県の事業ではない、他人事ではない、自分たちのふるさとの活性化のために活用しようじゃないかという観点で、主役となって残された数カ月間取り組んでいただけたら幸いに思っております。

以上で、30分以上過ぎましたので、私のほうからのご挨拶は終わらせていただきます。ありがとうございました。